

原爆は絶対作ってはなりません

宮井マサコ（当時16歳）
美瑛町



あれから70年の月日が流れます。

1945年8月6日の事は昨日の事のように鮮明によみがえります。私は16歳、爆心地から3.3km離れた庚午北町というところにいました。あの日は良く晴れた朝、近所の人と軒下で立ち話をしていました。その朝出された空襲警報が解除になりホッとしている時、急に青白い光がまたたき、その瞬間体を包み込むような赤い炎が、払いのけ様とする間もなくウワーと来ました。こんな所にまで、と私たちは口々にわめきながら夢中で家の中に駆け込みましたが、下敷きになると思いました外へ飛び出しました。ほんの一瞬の間でした。気付いて見ると家はすさまじいばかりの壊れ様で、天井、屋根とも吹き飛び、壁は抜け、ガラス窓は枠ごと吹き飛び、倒れた柱やタンスにはガラスの破片が突き刺さり、ものすごい破壊力を見せつけていました。幸い姉も私も不思議なくらい怪我もせず助かりました。

どの位たったのでしょうか、急に空が暗くなり黒い大きな油の様な雨が降ってきました。町内の人々は口々に、油をまいて焼け野原にするつもりだと叫び、大騒ぎになりました。あの時はラジオも鳴らず情報がなくて不安が一杯でした。

やがて次から次へと避難してくる人たちがこちらに向かってきます。まるで幽霊の様でした。灰をかぶった髪は逆立ち、顔や手足はひどく火傷し、前に出している手の先には火傷ではがれた皮膚がぶら下がっています。血だらけの足を引きずりやっと歩いてきます……。

今でも忘れられない事があります。その日市内の立ち退き疎開にあっていた中学生が、丁度作業を始めたばかりの時に原爆が落ちたのです。その中の一人が助けを求めて必死に走って飛び込んできました。その中

学生は、上半身裸で、学生帽の下から体全体がひどい火傷を負って、額の皮膚が眉毛のところでぶら下がり、顔は赤黒くはれあがり、「熱いよ、熱いよ、助けて、助けて」と叫ぶのです。ためてあった水道水を何回かけてあげても一時的な気休めです。薬もありません。私は姉の標準服を着せて、この先に救護所があるからそこへ行ったら、と言いました。地べたに転がって苦しむ姿を見るに耐えられませんでした。何とむごいことなのでしょう。被爆という運命に出くわした中学生でした。住所名前を聞いたのですが何か紙にでもメモしておけばよかったと思います。8月6日には一番先に思い出します。

夕方になるとあちこち避難していた人や朝勤めに出た人が自分の家の所にもどってきました。病院に通っていたおばあちゃんが帰らないということで、町内や身内の人々が探し歩きました。脇の下に残っていたわずかな布切れでようやく見つけ出したのですが、そのおばあちゃんも二日目には亡くなりました。爆心地に家族を探しに行った人も、その後熱が出たり髪の毛が抜けたり、体調が悪くなって亡くなった方も大勢いました。原爆の恐ろしさは言葉に尽せません。二度とあってはならないことです。

その年の10月、豪州兵が上陸するので田舎のある人は避難する様にと連絡があり、私たちは荷物をまとめて芸備線の向原の伯母の家に行くことにしました。朝早く町内の方と別れ、姉と二人で広島市内に入りましたが、原爆が落ちてから初めて見る広島は見渡す限りの焼け野原です。中国新聞社、福屋のデパートなどの大きなビルも焼け焦げて無惨な姿をさらしています。大きな木もあったのですが、それも見当たりません。赤く錆びついた線路にはただ焼け焦げた電車があるだけ、通いなれた相生橋や原爆ドームを見て、ただ茫然と立ちすくむしかありませんでした。原爆投下から何日も何日も赤い炎に包まれ、多くの人々が助けを求めて苦しんで亡くなった町をしっかりと見ておかなければと、重い足取りで歩いたことを思い出します。

その上大型台風が通過した後でしたので、田舎の伯母の所へ行くにも線路は不通の所がたくさんあり、夜遅くにやっと着きました。私は着くなり倒れ込んでしまいました。そして何日も熱が続き、歯茎からは出血

し、食べた物が消化されず下痢をしてしまいます。少しよくなってもまた出血を繰り返し、身体はいつもだるいのです。洋裁学校に行っても1日行ったら疲れて次の日は休む、という状態でした。そうしたことが数年間続きました。あのときのことを思えばよくこの年まで生きられたものだと思います。

今年は終戦70年の節目にあたります。言い尽くせないつらいこともたくさんありましたが、平和、平和は素晴らしい。何ものにも変えられません。原爆は絶対作ってはなりません。原発も後始末のできないものは絶対やめるべきです。私は強く反対します。



被爆を世界に伝えて

姉妹が見たヒロシマ

①

手記集の題名は「Voice from Hiroshima」から。手記をつづ

た手記集の題名は「Voice from Hiroshima」から。手記をつづ

た手記集の題名は「Voice from Hiroshima」から。手記をつづ

戦後70年 その記憶



上川管内美瑛町の自宅で語り始めた。

次々と肉親世界

失意の中あの日迎えた



父彌川佐市さん、母シツ子さん、次女高藤シツ子さん、三女宮井マサ子さん、母シツ子さん（故人）、長男晋さん（同）、長女トシエさん（同）＝宮井さん提供＝①広島の幸かった日々を振り返る宮井マサ子さん

①1932年（昭和7年）、上川管内美瑛町での家族写真。右から、次女高藤シツ子さん、三女宮井マサ子さん、母シツ子さん（故人）、長男晋さん（同）、長女トシエさん（同）＝宮井さん提供＝①広島の幸かった日々を振り返る宮井マサ子さん

「気候の良いところで療養させたい」と、佐市さんは正の初め、上川管内上富野町に入植。その後、美瑛町に生鮮食品の店を出した。町内には日本陸軍第1師団の演習場と宿泊用の廠舎があり、商売は繁盛。裕福暮らしだった。しかし、戦況が悪化。従業員が出征し、頼りの長男晋さんは肺病を患った。わし、翌44年春に死去。北

海道帰ろうかと悩むようになった父も、母を追うまで半年後に病気で亡くなった。この時期、シツさんは結婚する。相手は、長野の農家の長男で、当時中国で憲兵隊にいたという。既に結婚して中国に居た二番上の姉トシエさんから写真が送られてきた。本人と合わないまの「早急結婚」だった。広島へ、夫の実家の長野を復しなから父母を看病し、亡くなった後は、マサ子さんを人かきりにさせまいと、広島で一緒に暮らした。近くの店洋装を習い、家で洋服の仕立ての仕事に精を出した。軍需工場に従事（大朝明水が担当し、3進徳高等女学校に現進徳

女子部）に在学していたマサ子さんは、学務員で市内の軍需工場に携い、魚雷の部品づくりに従事した。「星夜交代制で夜勤もあつた。部品を必ずで磨いたり、穴を開けたり、工員さんと同じ仕事をした。学校には1カ月間に1回くらいしか行けませんでした。そのうち体調を崩し、休学した。

『北海道新聞（空知版）』二〇一五年八月二五日付

被爆を世界に伝えて

姉妹が見た「ヒロシマ」

1945年、昭和20年8月に広島で被爆した齋藤シズ子さん(82)・深川市庄(伴)・宮井サヨ子さん(86)は、川管内箕野町在住の姉妹にうつて戦後は被爆に伴い体調不良の不安や「戦い」でもあった。

戦時中、「写真結集」したシズさん(左)に、出征先の中国から夫の忍さん(74年に50歳で死去)が戻ったのは、終戦から2年ほど過ぎたころだった。

つづは忍さんの実家の長野県で暮らし始めた。家業は農業。シズさんは初めて野仕事に出され、戸惑いの連続だった。

忍さんは大層警護する近衛兵で、その後、憲兵として中国に渡り戦後は戦犯となり香港の刑務所にたど話していた。その影響が、ソビエトに勤めても縮

戦後70年 そらの記憶

①1978年、昭和53年、広島市内を歩いた齋藤さん(右)、宮井さん。このとき入国をめぐって、被爆者手帳を申請した下道内在住の被爆者入国の手記を英語に翻訳した冊子、斎藤シズさん、宮井マサコさん姉妹も手記を寄せて、海外に発信された。



② 辞めさせられる。3、4回仕事を変わった。シズさん。とっ

③ 心の支えは仕事

1950年、昭和25年ころ、シズさんは北海道での再出発を決め、親戚を頼り、忍さん(深川)来た。

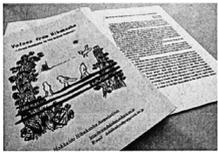
最初の商売は露店だった。一袋りてオモチャを売って、2万円くらいや

寝て、飯(ごう)で飯を炊いて食べました。

51年(同26年)に「齋藤商店」を開店し、鮮魚などを売った。店繁盛するも仕出しも始めた。

シズさんの次女広上和子(今63)・深川は「母は驚愕まよった働いた。失敗してもよまじない。原爆を生き延び、それに比べてはじめてこないと、思っていたのでは。87年に

生き延びた体験 後世に



齋藤さんの手記英訳した佐々木あすま

は妻会場のある、日の出会館を新築、社員として事業発展を走り続けた。

でも、シズさんは「被爆を」に「なかつた」広島での体験は家族以外には話さず、シズさんの経歴を「知る関係者」の講演の依頼断り続けた。

「私が被爆者だ(周囲の人)に話したら、どうするんではないかと(誤解)されて、人が寄ってな

くなを思った

マサコさんは被爆体験を周りに話してはいたが、しかし、「今は体が良くなったからいいじゃないかと、覚めた反応に戸惑うことも多かった。

それどころか、共に「広島での体験を後世に伝える」と行動始めた。高校卒業相手に話したり、2008年には、旭川(原爆投下)が、痛切に心に響く。(しか)生存者があすまでなくなつたらアメリカ人はの事業を考へようとなをなをどうと」しつづ、ブログの記事を読むと、アメリカ人がやっていたことを記憶にとめておくことができ」と書いてた。

マサコさんは、手記をこ

そして今年、米「ユニヨーク」で核拡散防止条約再検討論で配布された手記は、高齢のためこれが最後(マサコ)との思いを込め、8月1日の出来事をそれぞれ書いた。

シズさんの手記をボランティアで英訳した十勝管内上野幌講師の佐々木あすま(54)は、文章に引は強く対しま

『北海道新聞(空知版)』二〇一五年八月二七日付